



# 志度高だより 一飛翔の窓

第100号  
(H22.6.25.)

## 「紫の陽の花」

梅雨の最中、毎日雨に降られ鬱陶しい日々が続くが、これも天の采配で動植物にとっては恵みと考えると、それほど苦にもならない。ただ、むしむしするのは閉口だが……。

この頃になると一つのことが頭を突く。とはいっても、そのこと自体はそうたいしたことではない。記憶の縁に辛うじて引っ掛かっている程度のものだが、他の要素が絡まって、駱駝の瘤並には輪郭が際だっている。その要素とは、紫陽花である。

小豆島にいるとき、紫陽花を見ようと、小豆島霊場第七十六番奥の院三暁庵に行った。三暁庵は訪ねる人としてほとんどない穴場的庵で、じっくり静けさを味わうにはもってこいの場である。その日は雨も上がり、ときどき雲間から太陽が顔を覗かせた。紫陽花を見るにはいい天気だ。晴れの日が好きな人が多いだろうが、微妙に色彩が変わる紫陽花は雨後の薄曇りが似合う。

車を降り、弘法大師が衣を洗ったとされる池（泉）に向かった。途中、参道に沿って紫陽花が咲いていた。花の房にはまだ雨の滴が残り、穢れが洗い流された直後だった。水滴に紫陽花の青がにじんでいる。弘法大師像横に清水が湧く泉があり、それを囲んで紫陽花が群生している。それが山の斜面へとなだらかに続く。花は小振りだが、青、紫、ピンクの三色あり、色が溶け合ってもう一つの色調を生み出す。その色調があまりに繊細だから、ときどき雲間を割って降り注ぐ陽光に、かすめ取られるかと心配になる。紫の陽の花。言葉を合わせるだけでも、心ざめく。

本堂で賽銭を投げ泉をぐるっと回ろうとしたら、人影が二つ見えた。一人は老人でこの庵の世話人。もう一人は遍路姿の女。歳は分からないが、見るからに生気に乏しい。というか、影が薄い。私は彼らを避け泉の西側へと進んだ。三十分くらい花房にシャツの袖を濡らして歩いた。少しもの悲しくもあったが、それでもこの上なく静かな気持ちで花を愛でることができ幸せだった。色が変わることか七変化とも言われるが、紫陽花は気に入りの花の一つである。

一散策終え本堂の脇を抜けて車に帰ろうとしたら、「ちょっと兄さん」と声がかかった。振り向くと先ほどの老人と遍路姿の女がいた。「何でしょうか」「あんたどこまで帰りなさる」「土庄ですが」「じゃあ、この娘さん大黒屋まで送ってこないか」大黒屋とは土庄町内にある遍路宿である。

どうしたものか、女は車に乗るとき「すいません」と消え入りそうな声で言ったきり、一言も言葉を発しない。妙な女だ。気味が悪い。まさか、と思ったが、狭い山道を蛇行しながらの運転、バックミラーで女の姿を確認することもできない。車内に沈黙のコンクリートが流し込まれていた。途中、女は瑠璃堂に寄って欲しいと、これまた蚊の鳴くような声で言った。女の顔を見たのは瑠璃堂から階段を下りてくるときだった。まだ若く、二十歳を過ぎたばかりだろうか。目鼻立ちはずっきりとして理知的な面立ち。しかし、化粧のないその顔は死んだように白く、髪も無造作に肩の少し上で束ねただけで、あえて年齢に不釣り合いなやつれを醸し出していると言ってよかった。

結局、その女とこれという会話を交わすこともなく、大黒屋に到着してしまった。着きましたよ、と言うと、バックミラーの中でこくりと小さく頷いた。ところが、車からすぐに降りようとしないう。「ここが大黒屋ですよ」と念を押すと、それは分かっています、と言うようにまたしても頷いた。男というのは、こういうときに気障でもいいから感動的な台詞を言うもんだよ、馬鹿野郎！

女はフーと溜息一つ落とすと、笠と杖を取りドアを開けた。右足を地面につけ、痩せた体をシートから剥がそうとして、ぼつり言った。「生きていくために、人間は多くのことを諦めなければならないんですね」「はあ？」あまりに突拍子もない質問に、気の抜けた返事しかできなかった。おい、ここは含蓄のある言葉でバシッと決めるところだぞ。「そう思いませんか」再度の問いかけに、頭の中を何度もひっくり返してこれだという台詞を探した。でも見つからなかった。もしかして、この女俺を試しているのか。「ええ、まあ」このドジ、何言ってんだ！「わたし、子どもの供養で小豆島を回ってるんです」「はあ？」

女はそう言い残し大黒屋に消えた。菅笠と遍路装束に「同行二人」と書いてあった。瑠璃堂で身が細るほど一心に拝んでいた。その理由が分かった。女の去った方に視線を戻すと、さっき三暁庵で紫陽花を照らしていたのと同じ灰白い光が落ちていた。そこにうっすら赤ん坊の寝顔を見たような気がした。生きるために人は多くのことを諦める、か。確かにそうだ。でもね、お嬢さん、諦めず胸の奥にそっとしまっておくことも、生きる力となるんだ。

今年も紫陽花の季節が来た。雨粒が紫陽花の花弁から、一つまた一つと滴り落ちる。その一粒一粒が花の色と命の鼓動を吸い取る。だから紫陽花は一雨ごとに花の色を変える。

